

## ■ちーびし

## ○狩野浩二「沖永良部における農業と人間形成」

—第11回定例研究会報告

第11回定例研究会（2004年12月15日）における狩野浩二先生（教育学部）の報告についてご紹介します。

狩野先生の報告は、沖永良部島に在住で、青年期に本土に出た経験を持つ二人の農業家の比較分析を通じて、青年期の過ごし方（青年期を十分に経験したかどうか）が農業のやり方、考え方、また学習の仕方にどのような影響を与えるか、という点を中心に考察しています。

意見交換においては、狩野先生の言う「青年期」の定義や青年期と農業のやり方の関係について議論が集中しました。また、研究会参加者からは、一貫して島内で農業を営んでいる農業家の農業スタイル（農業のやり方）が時間とともにどのように変化したかについても調査する必要があるのではないか、という意見がありました。

（研究会事務担当・山本一哉）

\*

**報告要旨**

二人の農業者の生き方を通して、そこにある特有の、人間形成の事実を抜き出す作業をしてみました。

農業の場合は、教育の場合と同様、命あるものを相手にする仕事であるという共通点があります。医療の場合も同様ですが、こうした仕事の上で大事になるのは、生物との接点ということです。教育の場合は、ヒトと接する局面においてどのように対応するかということが決定的に大事になると思います。農業の場合は、農作物との接点であり、育て上げる過程で、どの作物とどのように接するか

が大事になるのだらうと思います。

このような仕事をすすめる場合には、相手が生物ですから、つねに柔軟な対応が求められます。事前に決められた手順に従って、決められた方法で対応してもうまくいくものではありません。以前にうまくいった方法がまったく役立たない場合もあるし、失敗がかえって成功のヒントになる場合もあり、実際の対応場面を通して、“勘”や“コツ”という形で“ワザ”を身につけていく—「習う」型の学習が必要となります。

私たち教育学科のメンバーが直接に会い、お話を伺った農業者は、日々、農作物との対話を通して、仕事をすすめてこられている方たちでした。

そのなかで大変印象的だったのは、そうしたインタビューの最中に突然訪ねてきた若者が作物の病害虫について質問に来たことでした。大変気さくな若者で、相当に困っているというふうでしたが、先輩農業者を訪ね、対処の仕方を真面目に聞いているのでした。彼が帰った後、わたしたちは、どのような関係なのかを尋ねましたが、今日が初対面だということです。本当に自然に先輩農家を訪ね、話を聞き、帰って行った若者のさわやかな態度がどのように形づくられてきているのか、私は大変興味を持ちました。

初対面かどうかはさしたる問題ではなく、同じ作物を栽培する同志として、先輩は若者を迎え入れたのでした。このようなことが日常的に繰り返され、農業者は、作物との対話の“コツ”を一見習いながら一手に入れていくのだらうと思います。

報告では、二通りの技術形成論を考えてみました。このことは、参加しておられた前田晶子氏より、個人学習の問題であると指摘されたことで、私自身も頭の中を整理させることができました。

技術形成論のなかでは、「習う」型と、「学ぶ」型というように、二種類の方式をわたし

私たちは見出していたわけですが、この場合の二種類の方式は、いずれも個人学習の形態に属するものであるということになります。一般的には、教育とか、形成とかいう場合には、“集団”を想定するわけです。教育論の場合、特に狭義の教育論つまり、近代学校成立以降の教育論—では、個人がよりよく生きるということを前提にしますから、個人学習という形態が強く想起されますが、しかし、形成論の場合は、教化論と同様に、集団の内部での人間の成長を発想する 경우가多くあり、そうすると個人学習と集団学習の両方にまたがることになります。そうすると、「習う」型は、形成論ですから、学習形態として「集団」を想起する場合があります、そうすると農業者“個人”の技術形成論としてしまつては、矛盾が生じるということになります。

ところで、農業や医療、教育に共通する個人的技術形成論は、「習う」型の方式、つまり実際の作業を通してからだに染み込ませていくような学習方式が必要なわけですが、それを個人学習として実現させるという点で、「学ぶ」型の学習論との結合が必要である、と、研究会の後でこのようなことを考えてみました。

(狩野浩二)

定例研究会での配付資料（研究会の様子はICレコーダーで録音し、電子ファイルの形で保存しております）や今後の研究会の開催予定等につきましては、研究会事務担当の北崎浩嗣（099-285-7592）もしくは山本一哉（099-285-7595）までお問い合わせ下さい。